

川西市ふるさと団地再生協議会（平成24年度、第2回）会議録〈要旨〉

日時：2013年3月28日（木）13：30 ～ 14：30

場所：大和自治会 第1自治会館

出席者：会長：大阪大学大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻 松村暢彦准教授

委員：大和自治会長【地域住民】、多田グリーンハイツ自治会長【地域住民】、

清和台自治会長【地域住民】、大和ハウス工業(株)【開発事業者】、

能勢電鉄(株)【交通事業者】、(株)池田泉州銀行【金融事業者】

兵庫県阪神北県民局、川西市総合政策部長、

川西市都市計画課長（都市整備部長代理）

1. あいさつ：会長

2. 3 団地の取り組みについて：事務局

地域住民代表 A

- 大和団地では、親元近居推進の取り組みを進めているが、実際に地域の若い住民に聞いてみると、親が近くにいると、自分が出かける際に子どもを安心して預けられるので、重宝するとのことだ。若い人に時間の余裕が出てくると、自治会の役員としても積極的に参加してもらえる。親元近居がしやすい環境を整えてあげれば、もっと若い人に地域に入ってきてもらえるのではないかと考えている。
- また、セミナーの参加者の中には、自分が抱えていた不安が楽になったという意見を頂いた。移住・住みかえ支援機構の「マイホーム借り上げ制度」についても、将来に備えて、もっと詳しく聞きたいという意見も頂いた。
- 今後の取り組み課題としては、若年層の参加しやすい環境づくりに取り組みたい。一昨年度から行っている地域分権制度検討のワークショップでは、意識的にPTAや子ども会に声かけをした。その成果として、ニコニコプロジェクトと称して、地域で挨拶を積極的にしていこうという運動を展開していこうと考えている。意見を出した若いお母さん方も、自分たちがやらなければならないと考えてくれている。牧の台小学校でアンケート調査をしたところ、4年生までは挨拶ができていたが、5～6年生になると挨拶しなくなるという結果が出ている。若いお母さん方にも積極的に参加してもらい、ゆくゆくはママカフェや居場所づくりにもつなげていきたい。

事業者 A

- 子世代は、どの程度外に出て行ってしまっているのか。

地域住民代表 A

- 具体的にはわからないが、4年ほど前に、親を通じて子世代にアンケート調査を行った。その結果、「住宅を親から相続するが、どのようにするか分からない」が半数程度いた。「帰

ることができるなら帰りたい」「近くによい物件があれば住みたい」という意見もあった。現状では子世代のほとんどが外に出て行っているが、新たに大和団地に住まいになる人は、昔住んでいたなどで大和団地を知っている人に限られるだろう。

事業者 A

- 戻ってくる可能性のある人はどれくらいいるのだろうか。

地域住民代表 A

- すでに大和団地外で住宅を取得されている人や戻る意思のない人もいる。娘が団地内に引っ張ってくるケースが多い。戻ってくる可能性のある人は、全体の4分の1くらいだろうか。

事業者 A

- 4分の3が戻ってきてもらえないとなると、人口を維持するのは難しい。こういった人を新たにターゲットにしなければいけないか。こういった地域を対象に大和団地をPRすべきか、というところを考える必要がある。

事務局

- 今年度業務の中で、過去5年間の転出入の状況を分析している。平成25年度の協議会にはその結果を報告させていただきたい。ただし、データ上、親元近居かどうかはわからない。

事業者 A

- けやき坂や猪名川町では若い入居者が多い。ほかの地域と何が違うのかというと、住宅の価格が大きく違う。価格競争になっている。

地域住民代表 B

- 価格の影響は大きい。新たに開発する余地がどれだけ残されているかという点も大きく、3団地には開発の余地はほとんど残されていない。
- 住んでいる人は当面は住み続け、現状では空き地・空家もそれほど多くないことから、多田グリーンハイツでは、まずは今住んでいる高齢者が住みやすいまちにしていく取り組みを進めながら、若年層を呼びかけたいと考えている。高齢者向け・若年層向けの取り組みのバランスが必要だ。
- また、多田グリーンハイツの良さをPRする必要があるが、市内の人は知っているが、市外の人にはなかなか知らない。文教地区や緑の多さ等を他市にPRすることも必要。

地域住民代表 C

- けやき坂の注目度は高い。足の便が悪い地域で、阪急バスの路線を増やしてほしいという意見があるようだが、一方で、静かな環境を維持したいのでこのままでよいという意見もあるようだ。

地域住民代表 B

- 住民が若いうちはそれでよいのだろうが、何年かすると困るだろう。多田グリーンハイツも同様であった。時代とともにニーズは変わる。高齢者、若年層でニーズは異なる。逆にいうと、ここは高齢者が住みやすい地域、若年層が住みやすい地域というように分けて考えるのもあるのかもしれない。

- 多田グリーンハイツはすでに高齢化率がかなり高くなっているため、まずは高齢者が住みやすい地域をつくるため、お出かけ支援等に取り組んでいきたい。

地域住民代表 A

- 牧の台小学校は、今年度 83 名が卒業し、4 月には 91 名が入学する。一昨年度からの傾向で、若干だが子どもが増えてきている。東谷中学校の校長によると、今の小学 4 年生がピークで今後減少すると見込まれる。

会 長

- 教育は、良いテーマといえる。地域を評価してもらえ人を増やすためにも、地域を評価できる環境づくりを行うことが大切だ。価格を安くしないと人が入ってこないようにはしたくない。

事業者 A

- 能勢電鉄では、通学定期の利用者が増えている。遠方から市内の高校等に通う人が増えているようだ。特に、多田グリーンハイツ内の緑台高校は良い高校と認識されている。地域の評価を高める上では、学校にもがんばってもらわないといけない。

地域住民代表 B

- 高校に通ってもらうだけでなく、高校の近くに住んでもらえるようにもしていかないといけない。自然災害が少ない、緑が豊か、学校が良いなど、市外にも P R していきたい。

3.平成25年度 川西市ふるさと団地再生協議会について：事務局

川西市総合政策部長

- 行政だけでは地域づくりはできない。地域の方々のご協力は心強い。学識経験者や事業者の方々と一緒になって、地域づくりを盛り上げていこうという試みは全国的にも珍しい。来年度からは親元近居への助成制度も立ち上げて、机上だけでなく、具体的な施策を展開していく。今後とも引き続き皆さまのご協力をお願いしたい。

4.その他

(特になし)

- 以上 -